

てんぐこうおおやまもうで

#29 天狗講大山詣

作者：磯ヶ谷紫江（いそがや・しこう 1885-1961）

刊行：昭和31年（1956）



📖 解題

■ 内容

『天狗講大山詣』は、著者が昭和31年（1956）5月26日に行われた「天狗講発会式」と、翌日に行われた「酒祭り第五回」に参加し、その様子を記したもので、大山の歴史的考察も加えている。騰写版で、奥付に「限定 五十部 第七冊」（“七”は手書き）とある。「天狗講」とは小生夢坊が主催する文化集団で、平和祈念の大山カーニバルとして開催された。



[K18.64/3]

画家・随筆家・社会評論家であった小生夢坊（1895-1986）は、石川県金沢市に生まれ、19歳で『中越日報』の編集長を務める。上京後は浅草に住み、浅草に集う文化人・芸能人らの要となった。また、一葉記念館、下町風俗資料館の建設にも尽くしている。著書に『天狗まんたん』『小生夢坊随筆集』などがある。

発会式の当日は、余興として無形文化財の「大和舞」と「大山能狂言」、林家正蔵の落語「大山詣」が行われ、翌日に「包丁式」（材料に手をふれず包丁と箸だけで調理する儀式）と「巫子舞」が行われた。

また、著者の連れの方が上社の「石尊祠堂」の床下に潜って、陰石である「臥石（福石）」を撮影した、とも書かれている。なお、著者によると臥石である立石もあり、大きさは三尺余りで、大天狗の鼻に似ているが、「深く秘められて窺知することの出来ないのには、聊か残念なことである。」と

第3章 思想・宗教

書かれている。

本書は、当館以外に東京都立中央図書館、横浜市立中央図書館、伊勢原市立図書館で所蔵が確認できる。

■ 作者

磯ヶ谷紫江は、墓蹟研究者であり、死絵（人気のあった歌舞伎役者や芸人の歿後に板行される錦絵）の蒐集家でもあった（『愛書家の散歩 続』）。判事だった父の赴任先の栃木県で生まれ、日本大学法科を卒業して法官庁の執達吏を務めた。『墓碑史蹟研究』や、浅草での会席記録である『奥山』、趣味生活を記した個人雑誌『紫江帖』などを発行している。また、句会「半面」を主宰し、蕎麦の研究も行っていた。

著者は明治43年（1910）にも大山を訪れており、四谷愛住町（現・新宿区）の自宅を夕方に出て、渋谷から二子の渡しを経て翌朝、大山の下社に着き、さらに奥の院まで下駄で登ったと記している。「天狗講」に参加した時は亡くなる5年前だったが、最大斜度30度もある男坂を登って下社まで行った、と記されている。

参考文献

- 『小生夢坊随筆集』小生第四郎著 八光流全国師範会 1973 [K97.64/16]
- 『愛書家の散歩 続』斎藤夜居著 出版ニュース社 1984 [024.2/3/2]
- 「王朝しのぶ包丁式 伝統の技 横浜」（『神奈川新聞』1994年5月16日朝刊 神奈川新聞社）[K07/10-1/1994-5]
- 『近代日本社会運動史人物大事典 2』近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編 日外アソシエーツ 1997 [309.03/3/2]
- 「神輿200キロ『おくだり』伊勢原・大山阿夫利神社大祭」（『神奈川新聞』2002年8月28日朝刊 神奈川新聞社）[K07/10-1/2002-8]
- 鈴木めぐみ「かながわ資料室所蔵の大山関係資料について」（『神奈川県立図書館紀要』第9号 神奈川県立図書館 2011）[K097/4/9]